



奈良県

いのちの教育

令和7年度「いのちの教育実践研究事業」



奈良県

「いのちの教育」

あらゆる「いのち」に共感し
「いのち」を大切にする心を育む教育

奈良県が目指す「いのちの教育」

- 動物への思いやりを深め、「いのち」の大切さを実感させる。
- 他者との関わりを深めながら、情操を豊かにする。
- 野生生物を含む自然環境の保護についての理解を高める。

「いのちの教育プログラム」とは？

うだ・アニマルパークで実施している「いのちの教育プログラム」では、私たちと動物との関わりに気付き、動物にも感情や要求(ニーズ)があるということ、動物の「いのち」が私たち人間と同じであることを感じ、それぞれの動物の「いのち」がよりよく生きるために私たちがどのような責任を負い、果たすべきなのかを考えます。



「いのちの教育実践研究事業」とは？

奈良県教育委員会は、うだ・アニマルパークにおける動物とのふれあい等を生かした「いのち」に関する学習を核に、教育活動全体で生命を尊重する心を育てる実践的な研究を行う「いのちの教育実践研究校」を指定し、その取組を県内に広く知らせています。

令和7年度は奈良市立三碓小学校と宇陀市立室生小学校を指定し、取り組んでいただきました。

うだ・アニマルパークについて

宇陀市大宇陀の県畜産技術センターでは、60年以上にわたり、牛・豚・鶏などの試験研究を行い、様々な成果を上げています。平成13年4月に大家畜(牛)部門が宇陀郡御杖村の「みつえ高原牧場」に移転したことによる敷地の有効活用として、動物とのふれあいを通して次代を担う子どもたちの健全な育成を目指すとともに、県内外のみなさんにレクリエーションの場を提供し、社会全体の発展に寄与することを目指し、うだ・アニマルパークを設置することにしました。

うだ・アニマルパークは、人と動物とのふれあいを通して、動物を学び、動物から学び、そして動物のために学ぶ「いのちの教育」を行い、広く県民に、動物全般に対する理解を促進するとともに、動物に対する愛護の思想について普及啓発を図り、豊かな社会づくりに寄与することを目的とした施設です。



奈良市立三碓小学校 第2学年

『みんないっしょに生きている』

【研究課題】

三碓小学校は、緑豊かな閑静な住宅街の中にある学校である。児童は明るく素直で、教育熱心な保護者の方が多い地域である。学校教育目標として『自ら考え、ともに学び合い、学びを表現・深化できる児童の育成』を掲げ、「しっかり考える」「やりきる」「思いやる」児童の育成を目指している。

子どもたちは友達や生き物と関わりをもちたいと意欲に溢れている一方で、どうすればうまく関わっていくことができるのかがわからないため自分から積極的に行動できない子が多い。興味はあっても、経験不足から相手の思いを想像する力が足りていないように感じている。「いのちの教育プログラム」に参加することで、生き物と接し生き物や命について考える機会となってくれることを願っている。

【取組の概要】

○「大きくそだて わたしのやさい」

・生活科

夏野菜を育てる学習では、自分が責任をもって世話をしあげないと植物の生育に影響が出ることを経験した。季節的に水やりを1日でも忘れると葉がしおれる野菜の姿を観察し、植物も生きている存在であることを実感することができた。

○「大切ないのち～わたしたちのたん生～」

母親と赤ちゃんがつながっていることをへそのおをテーマに学習した。赤ちゃんがお腹の中にいる間、お母さんが食べ物や飲み物、動き方などいろいろなことに気を付けながら生活していたことを知ることができた。自分を生んでくれた両親に感謝の気持ちを持ち、小さな命を守って育てていくことの難しさについて考えることができた。

【成果】

1年間を通して、生活科の学習を中心に「いのちの教育」に取り組んだ。1学期の生活科「大きくそだてわたしのやさい」の学習では、夏野菜を育てる活動を通して、児童は自分が育てる野菜に愛着をもち、責任をもって世話をする態度を育むことができた。また、年間3回実施したうだ・アニマルパークによるいのちの教育プログラムは、子どもたちが命や生き物について新たな視点から考えるきっかけとなった。知識として「人も動物も生きている」ことを理解していても、具体的にイメージすることが難しい児童にとって、体験を通して考える貴重な経験となった。3学期には、自分がどのように生まれ、成長してきたのかについて家族にインタビューを行い、自身の成長を振り返る中で命について考える学習を進めた。このように、植物・動物・自分自身の命について学ぶ機会を重ねたことで、児童が命の尊さを多面的に理解し、考えを深めることにつながった。

○いのちの教育プログラム

普段の生活や教科書からの学びとは異なる体験を通して、新たな学びを得ることができた。よく知る身近な生き物であっても、「ペット」「家畜」「野生動物」と違いがあることを初めて知った児童が多かった。心音を聞く体験を通して、動物も人と同様に命ある存在であることを改めて実感することができた。

「大きくそだて わたしのやさい」



観察記録より

「わたしがだいじにしているピーマンです。いちばん上に二つのちいさいはっぱがありました。元気にそだったらうれしいです。まるくてかわいいです。」

「ぼくのミニトマトに実ができてきました。まだみどり色です。大きさは2cm6mmくらいです。前までは花だったのに実になってうれしかったです。」

「毎日水をあげて元気に成長してくれてうれしいな。はやくおいしいオクラができないかな。」

「わたしはミニトマトを育てています。ぐんぐん成長している様子を見て、とてもうれしいです。」

「大切ないのち～わたしたちのたん生～」



赤ちゃんの人形を抱っこした児童の感想

「小さいのに、おもくてびっくりした。」

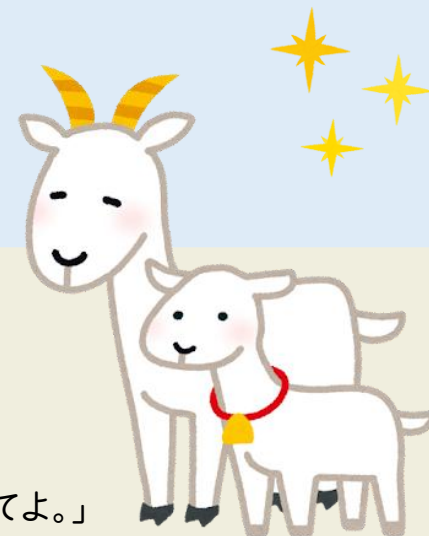
「おなかの中にこんな大きい赤ちゃんが入っているなんて、お母さんはすごいなと思った。」

「じぶんも赤ちゃんのときは、こんなに小さかったのかと思った。」

「この前生まれた弟もちょうどこれくらいの大きさだった。」

「こんなに大きな赤ちゃんを、お母さんはどうやって生むのかな」

動物～いのちの教育～



【児童の記述より】

「かいぬしさん、はやくあらってくれ。」
「さんぽはうれしかったけど、体もあらってよ。」
「ちゃんとおせわしてよ。」
「ほっとかないで。かなしいな。」
「ほんとはぼくも、かぞくなのに。」
「おへやの中をきれいにしてほしいよ。ぼくもなかまに入れてほしい。」
「なんであそんでくれないの。ぼくもなかまに入れてほしい。」
「ぼくはすきなように、自分でできないんだから。」
「かいぬしさん、ぼくをあらって。ぼくもおさんぽしよう。」
「ぼくにも楽しいことさせて。かいぬしさん、ぼくかなしいよ。」
「ぼく、おふろにも入ってないし、あそびたいよ。」

ケージに入れられたまま世話をされずにいるペットの気持ちを考える場面では、児童は動物の寂しさや悲しさを想像しながら、その思いを書くことができた。普段、動物と関わる機会が少ない児童も、「もし自分がそのような立場だったら、どのような気持ちになるだろう」と考え、子どもたちなりの率直な思いを交流することができた。

宇陀市立室生小学校 第1学年

『みんなのいのち』

【研究課題】

平成28年4月に室生東小学校と室生西小学校が統合し、室生小学校が開校して10年目を迎える。校区は山や川に囲まれ、周囲の自然も豊かである。

室生では今も農林業を営む方が多く、本校の生活・社会科・総合的な学習の時間等、ゲストティーチャーとして地域の良さを伝えてくださっている。その中のひとつ「うだ・ランチプロジェクト」では多種多様な栽培の体験だけでなく、種の交配に関するラボを見学させていただいた。

以上のように栽培に関する体験は多いが、その後子どもたちが主体的・意欲的に活動するまでに至っていない。

また、動物に関わる機会が少なく、生きとし生けるものを総括的に学習する機会を設ける必要がある。

【取組の概要】

○「いのちの教育」プログラム

- ・「私たちと動物のつながり」出前授業
- ・「動物と私たちの『命は同じ』」
宇陀アニマルパーク
- ・「動物のために私たちができること」
出前授業

動物や人間との関わりについて考えることができた。

○植物：生活科・特別活動（縦割り班）

あさがおの他、2年生と一緒にサツマイモの栽培を行った。縦割り班でマリーゴールドやビオラの世話をした。

声を上げずとも大切ないのちであることを体験する機会となった。

【成果】

2年生と一緒にサツマイモを苗から育てたり、学級園で育てている野菜（他学年が管理）を見たりすることで、植物の種類により成長過程が異なることを知った。

うだアニマルパークに出かけていった2回目の学習では、実際に動物を見たりえさをやったりして、動物への愛着を深めることができた。また、拡張心音計で一人ずつ心音を聞かせてもらったことは、命を「音」という形で認識できた貴重な経験だった。

1月の出前授業は、自分たちと動物のつながりに気付いたり、動物の気持ちを考えたり、「食べる」という営みは自分たちが動物の命をいただいていることだと知ったりして、一人一人が思いを新たに学習となった。

漠然と「命は大事」という認識をもっていた子どもたちであるが、この学習を通じてどんな行動が命を大切にすることに繋がるのかを具体的に考え、実践する意欲をもつようになった。

○国語科

- ・第4回奈良県「いのちの作文コンクール」への取組
「いのちの教育プログラム」で訪れたうだ・アニマルパークでの体験を文章にした。
- ・入賞作品「いのちの音」
心臓の音を聞いた体験を元に綴ったもの。

「あさがお」

一人一鉢であさがおの観察をした。日に日に大きく成長していく姿を見て、喜びと驚きでいろいろなつぶやきがあった。

(たね) ぎょうぎみたい。山の形やなあ。スイカみたいや。

(葉っぱ) ベルの形。ちくちくしてるなあ。ふわふわやな。

(たねとり) こんなにいっぱいとれたなあ。

一人5個しかまいてないのに、こんなにとれたなあ。

一つの花からたねいっぱいとれたな。

(リース) 長いつるやなあ。こんなにのびてたんやなあ。

きれいにかざろう。



「わくわくタイム」



朝タイムに縦割り班で、春にはマリーゴールド、秋にはビオラをプランターに植えた。班のみんなで仕事を分担して、協力して植える姿が見られた。



いのちの教育プログラム～11月～

うだ・アニマルパークへ行き、「いのちの学習」の授業を受けた。

自分の心臓の音を機械で聞かせてもらったり、ヤギや羊の餌やりや多種類の動物を見学したりした。

実体験を伴うことで、動物も人も生きていることを身近に感じ取ることができた。



ドッドツという
音に聞こえる

【日記より】

- ・ぼくのしんぞうの音はどっくどっくどっくときこえました。ともだちの音はどくどくどくときこえました。はやさがちがいました。はじめてわかりました。みんなちがうけどいいなとおもいました。
- ・やぎとひつじのえさやりをしました。モグモグおいしそうとおもいました。さわったらモフモフしてきもちよかったです。

いのちの教育プログラム～1月～

うだ・アニマルパークの方が本校に来られ、授業をしてくださいました。

子どもたちが動物にできることをホワイトボードに書き、発表した。

